

学友かわら版



国際ロータリー第 2770 地区 学友会発行
第 7 号 平成 29 年 9 月 2 日

目次

1. 巻頭言 「財団奨学生 それは世界人類に奉仕するロータリーの投資
～学友の皆さんの知的経験から奉仕への意思の結集を～」
学友会会長 服部純一 …………… 1
2. 「被災者と共に汗する支援」
1992 年～1993 年度派遣 国際親善奨学生
牧由希子 …………… 2
3. 2016～2017 年度留学生報告 …………… 4
4. 「財団奨学生 それは世界人類に奉仕するロータリーの投資
～学友の皆さんの知的経験から奉仕への意思の結集を～」
学友会会長 服部純一 …………… 11
5. 編集後記 …………… 12

巻頭言

財団奨学生 それは世界人類に奉仕するロータリーの投資
～学友の皆さんの知的経験から奉仕への意思の結集を～

RI2770 地区 学友会長 服部純一



昨年度本学友会はロータリー財団 100 周年を記念して、学友によるシンポジウムを開催しました。双日総合研究所の多田幸雄さん、信州大学の浅見崇比呂さん、茨城大学の矢島裕介さん、日赤秋田看護大の柳生文宏さん、昭和女子大の原田俊明など各分野で活躍されている経済や科学、教育の専門家が結集しました。また、11 月に開催された日本ロータリー学友会のシンポジウムでは、日本人 2 人目の財団奨学生だった緒方貞子さんの薫陶を受けた世界の人道支援に活躍する学友が結集し、その中には現在国連事務次長として活躍されている中満泉さんも参加されました。

少し前、RI の会員増強活動の一環として、財団奨学生などロータリーの青少年育成事業に関わった人材をロータリアンにというスカウトキャンペーンがあり、お誘いを受けた学友もあったかもしれませんが、私がロータリアンとのセミナーや卓話でお話するのは、「ロータリアンになることが学友の使命ではない。むしろ各分野の専門家として世界や日本の人々への奉仕という立場で活躍し、ロータリアンの奉仕活動にも協力できる人材になることが、育てられた人間の本来の姿だろう。」ということです。それを私は、「世界人類に奉仕するロータリーの投資」という風に説明しています。投資(stock)には「蓄える」という意味もあ

ります。財団奨学生は、ロータリークラブに即物的に貢献できていないかもしれませんが、世界人類に奉仕するロータリーの理念に関しては大いなる投資です。

私は学校の教員として生きてきましたが、教育という仕事はまさに将来に輝く人間を育てるために、教員だけでなく保護者や地域の方の力を結集することだと思っています。次代の社会を創る人間を育てるために、学友の皆さんの知的経験を、新たな奨学生の育成や、ロータリアンの奉仕活動を支える意思を結集し、できることから協力していきましょう。

「被災者と共に汗する支援」

1992-93 年度派遣 国際親善奨学生
川口 RC 推薦 イギリス・レディング大学留学
牧 由希子

1992-93 年にロータリー財団奨学生として英国留学させていただいてから 20 年以上もの時が経ちました。留学先でお世話になったロータリアンのご家族とは現在も親交がありますが、国内の学友会に何の奉仕もできず大変申し訳なく思っています。

私は、留学を終えた翌年から、ルワンダ難民緊急支援から始まり、アフリカや沖縄をフィールドに、長期にわたって生活をしながら環境保全や地域振興事業に関わってきました。2014 年以降は、家族の状況を考え、再び活動拠点を国内に移すことに決め、東北復興支援事業担当者として現職に就きました。2011 年の発災時は、ちょうど家族でボツワナに赴任中だったため、震災被害の様子は TV 越しに見るしかできなかったのもあり、少しでも東北に貢献することができたことは幸いでした。

そして現在、7/5 に九州北部地方を襲った豪雨被害に遭った福岡県朝倉市の被災現場に入っています。朝倉市だけでも 39 名の人的被害と 1332 件の住宅被害を出し、同災害は激甚災害に指定されました。そこで、発災から 2 週間後に日田市にベースを開いた九州キリスト災害支援センターの協力団体として 1 カ月間被災地に派遣されることになりました。発災から 1 カ月、まだ緊急期にある被災地では、まずは生活再建に向けての復旧支援が必要であり、被災者の精神的負担を軽減するためにも、住宅の隅々まで入り込んだ土砂を取り除くことが急務となっています。私たち民間団体は、一人でも多くのボランティアを集め、重機が入らない住宅での泥かき作業などを人海戦術によって行っ

ています。私のミッションは、作業現場に入りながらも、被害の検証と今後の防災対策を検討するための調査を並行して行うことです。今回の豪雨による大水害は、異常気象によるものであり、今や「数十年に一度」は珍しいことではなく、どこでも起こり得る地球規模の環境問題だと思っています。この災害から得られる教訓をもとに今後の自然災害に備えるための対策を考えていきます。





私はこれまで、なるべく「現場に身を置く」仕事を選んできました。なぜなら、そこにリアリティと答えがあるからです。課題解決に欠かせないのは、そこに住む人々の経験から得られた知見やスキルです。私は被災者(受益者)と共に作業に汗するところから始め、信頼関係を構築しながら、彼らとの対話の中で情報収集を行い、解決策を一緒に考えていくプロセスが好きです。「支援」というのはどうしても

「与える-与えられる」という上下関係ができてしまいがちですし、自分がやろうとしないことを人にやらせるのは避けたいものでした。大変泥臭くて地味な活動ですが、今後も適切な支援を行うためにもなるべく多く現場に身を置き、共に汗する姿勢を持ち続けていきたいと思います。

2016～2017 年度留学生報告 1

オーストラリア・グリフィス大学院 小野恵
(さいたまシティーRC 推薦)

■近況報告

皆様こんにちは。現在オーストラリアのブリスベンで留学をしている小野恵でございます。こちらは、3月1日より秋ということなのですが、30度を越す日々が続いております、皆様いかがお過ごしでしょうか。

10月下旬に日本を出発し、早4ヶ月が経ちました。日本を出発した際は、緊張しておりましたが、空港到着の際にブリスベン・サニーバンクヒルズのロータリアンである、9630地区のアン・ブランドさんが迎えにきてくれ、暖かく迎え入れていただき、オーストラリア生活がスムーズにスタート致しました。アンさんには、ブリスベン市内だけではなく、ゴールドコースト観光にも連れて行っていただきました。また、アパートが見つかるまでの間、11月は、数日間ホームステイをさせていただきました。このようなホスピタリティ精神は、ロータリーを通しての留学だったからできたこと、ロータリアンの皆様には非常に感謝しております。また、ブリスベンのロータリークラブとコミュニケーションをとっていただいた財団奨学・平和フェロー委員会委員長、水野様にも感謝しております。

こちらの生活についてなのですが、物価が非常に高く、驚いております。(500mlのペットボトルのお水が3ドル、¥300弱です)。サンドイッチと飲み物を買うだけでも2,000円ほどする為、食事については毎日自炊をしています。

大学院は、現在中間試験中で、大量に課せられる課題と、リーディングに追われる毎日です。社会人生活を通して、学ぶことの大切さを知った後に実際に授業を受けることは新鮮であり、ケーススタディが多い授業スタイルの為、社会経験が大変役に立っています。大学院でのクラスについてですが、学部にもよりますが、私の専攻するインターナショナルビジネスの大学院に関して言えば、70%近くが海外からの留学生で成り立っているのではないかと思います。海外での情報が学生よりリアルタイムに聞けることが、日本の大学院では決してできなかった経験ではないかと思います。

現在は、ブリスベンのロータアクトに参加しており、こちらでのコミュニティー活動を行い、少しでも社会に貢献できるように、ボランティア活動を行なっております。ロータアクトのメンバーの中に、本年度日本に留学する



<ピースフェローとのランチ会>

メンバーがあり、日本にてロータアクトに参加したいとのことでしたので、ご紹介していただけたら幸いです。また、来月からは、地域の託児所にて子どものデイケアのボランティアも始める予定です。

■ カウンセラーのアンさんについて

ロータリアンのアンさんは、ブリスベンより約 15KM 南に位置する 9630 地区サニーバンクヒルズのロータリークラブに所属しております。夫婦共にロータリアンをしており、旦那様のレイさんは、ロータリアン歴40年だそうです。

アンさんは、社会に貢献したことがオーストラリア政府に認められ、昨年勲章を受賞された、お手本となるような女性です。非常に温厚なお二人で、毎週のようにご飯をご一緒させていただいております。

■ オーストラリアのロータリークラブについて



<左より、9630 地区ガバナー、奥様のスーさん、ピースフェローカンファレンスにて>

オーストラリアの生活は、基本的に朝が早い為、例会は、朝 6 時 30 分、7 時に開始される例会が多いです。私も毎週アンさんが6時 20 分に自宅まで迎えにきてくれ、例会に参加させていただいております。また、私もいくつかのロータリークラブにて卓話をさせていただきましたが、自宅の部屋の一室を改造した部屋で例会を行っているクラブもあれば、コーヒーショップを貸し切って行っているクラブもあります。こちらにきて、ロータリークラブの知名度の高さに驚きました。オーストラリア各地にて、各ロータリークラブが、ボランティア活動や

様々なイベントを行っていることが認知度の高まっている理由かと思えます。

1、2 月には、クイーンズランド大学に入学する平和フェローの奨学生がブリスベンに到着し、平和フェローとも交流をもたせていただきました。3 月には、ゴールドコーストにて行われたディストリクトカンファレンスに参加し、素晴らしい経験をさせていただきました。

2016～2017 年度留学生報告 2

オーストリア・ウィーン応用美術大学 坂本麻由里
(さいたま新都心 RC 推薦)

学友の皆様、こんにちは。現在オーストリアのウィーン応用美術大学に留学中の坂本麻由里です。皆様い

かがお過ごしでしょうか。

ウィーンは6月に入ってからずいぶん日が長くなり、現在は夜9時過ぎまで明るく、日が昇るのも早いです。ヨーロッパの暗く寒かった冬の時期とはまた違い、過ごしやすい日が続いています。

私の通っているウィーン応用美術大学は冬学期と夏学期の2学期制となっており、先日夏学期全ての授業が終わり、ついに夏休みに入りました。私は2学期を通して素描系の授業を中心に受講しておりましたが、日本の美術大学とは違った教授達の指導や学生達の姿勢がとても新鮮でした。日本の美術大学では入学の際に既にある程度の描写力が必要とされますが、こちらでは入学時、在学中共に技術的な面よりも個人の発想力や感覚、ポリシーを最も尊重しているようです。そのような環境の中で作られる学生達の自由な作品の数々を目にし、自分自身に足りない様々なものを痛感し、研究する日々です。

3月にはとあるご縁から、オーストリアのバーデンというところで毎年春に催されている「日本の春祭り」という日本文化を紹介するイベントに参加し、その一角で日本画の作品を展示する機会をいただきました。現地の方々に墨や岩絵具、和紙を使用した作品を見ていただき、あたたかいご意見やご質問を受けることのできた大変貴重な体験となりました。絵のコンセプト以外にも薄い和紙や墨のにじみや色味、岩絵具のきらめきに興味を持つ方も多く、日本画の素材自体の魅力を再認識すると同時に、画材を効果的に使用した表現方法の研究を今後より一層深めていきたいと考える機会にもなりました。

また、大学に通う一方、現在ヨーロッパで活動されているウィーン在住の女性アーティストの下で制作アシスタントも行っております。彼女は主に油絵を描いており、私自身とは作風はもちろん、制作過程や作品の見方も全く違うため大変勉強になります。そしてヨーロッパと日本におけるアーティストの位置付けも異なるため表現者の一人として、彼女から学ぶことは本当に多く、刺激を受けて自身の成長に繋がりたいと思っています。

こちらに来てから、今まで画集でしか見ることが叶わなかったアーティスト達の本物の作品を間近で目にできること、更に作品に描かれている場所を実際に訪れることのできる幸せ、感動をかみしめています。また、大学だけでなく素晴らしい収蔵品が揃う美術館や博物館、街並みや日々の生活の中からの学びや新たな発見も数多くあり、充実した日々です。皆様のおかげで無事に留学生活を続けられること、感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、今年は5年に一度、ドイツのカッセルで催される「ドクメンタ」や2年に一度の「ヴェネチアビエンナーレ」など、世界最大規模の現代美術の祭典が同時期に開催される素晴らしい年でもあります。残りわずかとなった留学生活をより有意義にするためにも、オーストリア国内だけではなく近隣諸国にも足を運び、少しでも多くのことを吸収して帰国したいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。



<写真左:バーデンでのイベントに来てくれた大家さんご夫妻との一枚。 / 写真右:いつも乗っているトラム。暖かみのある旧型車両がお気に入りです。>



<写真左:通っている大学と併設されているオーストリア応用美術博物館、通称 MAK / 写真右:素描の授業の様子(参照:diepresse.com/home/kultur/kunst/461817/Angewandte)>

財団奨学生 それは世界人類に奉仕するロータリーの投資 ～学友の皆さんの知的経験から奉仕への意思の結集を～

1981～82年度派遣 国際親善奨学生
浦和西 RC 推薦 アメリカ・ノースカロライナ大学留学
RI2770 地区 学友会会長 服 部 純 一

今回は、RI2770 地区学友会の設立からこれまでの流れと、学友会の意義を改めて学友の皆さんにご理解いただき、今後より幅広い「ロータリーの仲間(学友)」と交流し、連携しながら、学友同士の関わりを深めたいと思います。例えば、私が 1981-82 年に留学したアメリカ、ノースカロライナ大学の自閉症療育プロジェクトに、23 年後に留学された方が学友の中にいることを、今回の総会の連絡の中で知りました。今後同じ領域で仕事をする者として、その方とも連絡を取り、埼玉や日本の発達障害児のために連携していきたいと思います。せっかくロータリー財団の奨学金で学んだ者同士です。その関わりが、ロータリーの輪のように、自分の専門領域から広がるように、世界の平和や幸せのために協力していければと思います。

1. RI2770 地区学友会の流れ

RI2770 地区は、千葉県と同一地区であった 1972 年に最初の奨学生送り出して以来、45 年にわたって 380 人に達する奨学生を海外に送り出してきました。学友会も埼玉が RI257 地区として独立した 1977 年に第 2 期生的小林申幸さんを会長に、学友相互の交流やロータリー活動への連携のために結成されました。



一時期は単年度に 11～14 人の奨学生が選ばれてるということもあり、学友会メンバーによる語学選考試験のお手伝いやオリエンテーションのお手伝いなど、学友会が次期奨学生の育成に携わることに関わってきました。

また、奨学生が累計 100 名に達した 1986 年には、当時の田中一郎ガバナーが編集され、学友の留学体験記や、留学生が感じた世界の人々との交流などを綴った『留学生世界に翔ぶ』が出版されました。これは、287 ページで、学友自身の文章のほか、矢島裕介さんが「海外留学鳥瞰図－アンケート調査に投影された－」という学友 100 名アンケートで、留学に至る経緯、留学時の状況、留学後への留学体験の影響などを統計的に分析した文章も掲載



され、当時の国内ロータリーからも埼玉学友会が注目された出版となりました。

一方、1988年にはロータリーインターナショナルの地区再編成により、257地区が埼玉県南東部の2770地区と県北西部の2570地区に分割されたため、学友会も2地区それぞれが独自の組織となりました。そして現在1990年以前の学友会員は2770地区の名簿に登録されています。

2 RI から認証された「学友会」

学友会活動が盛んになる中で、国際ロータリーは、ロータリーと学友会とのかかわりをより強めるため、地区の学友

会組織を承認・登録するようにしています。私も最近までそのことを知りませんでしたので、初耳な学友の方も多いのではないかと思えます。2770地区学友会は、2007年3月にRIから認証を得て、登録された学友会になっています。最近、日本ロータリー学友会から認証状の確認があり、所在が不明になっていた登録証を再発行していただきました。



3 日本ロータリー学友会の設立と2770地区学友会の連帯

埼玉の学友会そのものは、この40年で埼玉に根付いてきましたが、一方で他地域の学友会とも連絡・連携を図り、協力して世界人類への奉仕活動を拡げようという動きもあります。その流れの中で、2011年には、日本各地区の学友会の連合体として日本ロータリー学友会が設立されました。今回の学友会総会には、日本ロータリー学友会の松下衛会長さんが来賓としておいでになり、午後の知的交流のつどいでは代表幹事の高木直之先生（東京海洋大学教授）に講演していただきます。

もちろん、埼玉の学友も世界各地や日本の重要な部署でご活躍されている学友はたくさんおられます。今後、そのような社会への人材がより協力できる体制を作っていきたいと思えます。

4 日本ロータリー学友会の活動

日本ロータリー学友会は、年1回の総会に加え、最近関東や関西などの地方の学友会の事業にジョイントする形で、近隣の学友会役員連絡会を持つたり、各県の学友会情報を共有したりすることを行っています。例えば、今年5月のRFT（ロータリーフェローズ東京）の会合に、関東各県の学友会長が呼ばれ、研修をしました。そこで学んだのがRFTの「知的交流のゆうべ」です。毎年、この企画で学友の専門的な話を聞く会を催しているそうですが、これは埼玉の学友会でも実践できると考え、今回「知的交流のつどい」を催しました。



そして、昨年11月27日には、都内で財団設立100周年記念の日本ロータリー学友会のシンポジウムが開催されました。当日は、ジョン・ジャーム RI 会長(当時)もお見えになり、元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんに、学

友世界人道奉仕賞が贈られました。(当日は中満さんが代理の受け取りとスピーチを代読)



そして、シンポジウムは中満泉・国連事務次長をはじめ、国連食糧農業機関シリア事務所長の日比恵理子さん、国連難民高等弁務官事務所の最前線で働いておられる赤阪陽子さんと阿阪奈美さん、日本国際ボランティアセンターパレスチナ駐在の金子由佳さん、国連UNHCR協会団体統括の中村恵さんがシンポジストとなって、難民支援や国際人道支援での現状と課題について話されました。司会をされたNHKワールドニュース部編集長の榎原美樹さんも、2600地区の学友です。

こうした、各界で活躍する学友の実践に刺激を受け、更により人のためになる生き方を学べるのも、学友のメリットだと思います。

5 各分野のプロフェッショナルが交流できる学友会に

シンポジウムを企画運営された方が、今回9月2日の知的交流のつどいで講演をしてくださる、日本ロータリー学友会の代表幹事で東京海洋大学教授として、船乗りになる学生さん達に航海英語を教えている高木直之さんです。これから私たち学友も、このような色々な場面で学友同士の交流を深め、各分野のプロフェッショナルが多方面の知識や経験を交歓できる、サロンのような活動ができればよいと思います。

そして、ロータリーの推進している様々な奉仕活動に、私たち学友会員ができる部分で連携したり協力したりできる、プロフェッショナル集団として集いましょう。

最後に、1つ提案です。RFT は東京のロータリークラブは古くから2つの地区に分かれた活動がおこなわれていました。しかし、東京に限ったことではありませんが、地方で奨学生の推薦を受けて留学された方も、その後お勤めが東京であったり、東京にお住まいであったりすることが、現在の日本では多くありますし、むしろ推薦を受けた地域に住んでいる学友の方が稀です。それをRFTとして、地方出身の学友も含め、学友が寄り合える場は、学友会としては今後必要な所だと思います。

埼玉も東南部の 2770 地区と北西部の 2570 地区に分かれています。学友の仕事や住まいを考えると、2地区に明確には分けられません。今後、学友の活発な交流を考えると「RFT 埼玉」のように、2つの地区の学友が協力して学友会の交流活動を工夫していくことも、必要なことかと考え、今後の検討課題として提案します。

学友かわら版第7号をお届け致します。

今号では、CWS (Church World Service) Japan に勤められ、東北や九州北部などの被災地で様々な支援事業に関わっておられる学友の牧由希子様から、お仕事の内容と、お仕事に対するお考えに関する記事を頂きました。また、かわら版前号(昨年7月発行)では出発前でした小野恵さんと坂本麻由里さんは、現在まさに奨学生としてそれぞれオーストラリア、オーストリアに留学中で、お二人からは留学地から報告記を頂きました。現地で肌で感じているからこそ書ける内容の記事でした。帰国されたときのお土産話を楽しみにしております。そして最後に、服部会長からは、RI2770 地区の歴史、日本ロータリー学友会との関わり、また埼玉西部の RI2570 地区との関わりに関する提言を頂きました。

皆さま、ご投稿有難うございました。

(「学友かわら版」編集担当) 小池剛史)